三河アララギ

２０２３年 令和５年４月 卯月（うづき）

四　月　号

第 七十 巻　　第 四 号

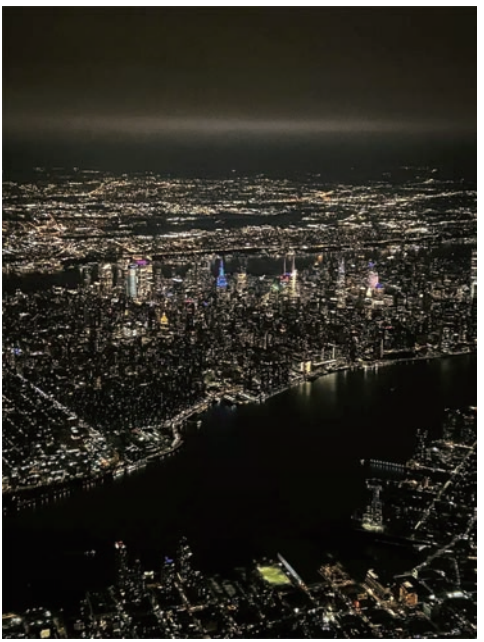
ニューヨーク日記（198）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

NEW YORK WINTER

Blue Shoe Diaries



飛行機の窓から景色を眺めるのって飽きないよね。もう数えきれないほど見てきたこのニューヨーク、今晩はくっきりと綺麗に見えるのは冬の晴れているとーっても寒い日だから。この距離から眺めるとパンデミック前のニューヨークに見えるけど実際はまだいまいち前の様に復帰しきれてないのよね。私も随分長く住んでしまったからそろそろ気分転換にマイアミに住みに行こうかな。帰って来たくなったら飛行機で3時間もかからないし！

I like looking out the window of an airplane, even if it's a view I've seen countless times. Tonight was a clear winter night flying in from Miami. Isn't she pretty? From this height, it looks like New York, how it was. But New York is still trying to regain its former glory after the pandemic. I've been living in New York for way too long, so it's time for a change in scenery. Will I miss this? Maybe, but I'll just be less than 3 hours away.

目次

第七十巻第四号（通巻八三二号）

表紙・春はやき　御津　磯夫（1）
ニューヨーク日記(198)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々後集」　今泉　米子（5）
昭和61年三月号作品　大須賀寿恵（6）
昭和61年三月号作品　夏目　勝弘（7）
昭和61年三月号・四月号作品　岡本八千代（8）
赤鬼青鬼　弓谷　久子（10）
スケッチブック　今泉　由利（12）
春めきて　安藤　和代（14）
家に居て　清澤　範子（16）
千両の朱　山口千惠子（18）
逸早く　杉浦恵美子（20）
春の訪れ　伊藤　忠男（22）
道端改修　白井　信昭（24）
雲の向こうに　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ　伊藤　晴江（28）
水野　絹子（28）
牧原　規惠（29）
稲吉　友江（29）
鈴木美耶子（29）
吉見　幸子（30）
牧原　正枝（30）
森　厚子（30）
山崎　俊子（31）
現代学生百人一首　東洋大学
佐藤　陽菜（32）
井村　望愛（32）
宮城菜々星（32）
奥田　美亜（32）
熊倉　悠香（33）
大川　珠佳（33）
河本　紗柊（33）
鈴木　愛弓（33）
植村　公女（34）
木村　歩歩（34）
『俳句』
今泉　如雲（35）
矢崎　直人（35）
今泉　由利（35）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（36）
五感を澄ませば(10)　杉浦恵美子（38）
附録(十)　矢崎　直人（40）
『運転免許証自主返納』　中屋　保之（42）
楽しい時間（125）　山本紀久雄（44）
『酔いの徒然』（132）　丸山酔宵子（46）
「オリーブの鐘」　高橋　育郎（48）
絹の話（149）　今泉　雅勝（50）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（52）
初狩便り17　花野みぶり（54）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（56）
康鍼治療院　玄　翁（58）
『令和五年二月十三日』　横山　精真（60）
編集室だより　今泉　由利（62）
「三河アララギ」について（64）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

散りのこるさくら黄葉の吹かれ危ふきを目守りつつゐる

大砂漠のただ中に出會ひて停戰の調印をする國をみつめよ

ふかき落葉踏みいざなひてわが家の公孫樹（いちやう）大樹の幹仰がしむ

もたらししものはみなよし仔（こ）もち柳葉魚（ししやも）仔もち若布（わかめ）もさりさりとして

風知草（ふうちそう）のいまを限りの黄のいろにこころを寄せてわれは見むとす

われの手のとどく下枝に小鳥らの殘しくれたる熟柿をあつむ

遠き近き友われにありポストまで歩む朝々を大切にせむ

北風になびきたわめる木や草や臥しつつ見ればわれさへなびく

冬雷のすぎゆきしあとに射し來たる光にわれの自由のねむり

翁草の白きにこ毛の芽をいひて來む春の日を待てとくださる

歌集「草々後集」

今泉米子

たちまちに破れ乱るる芭蕉見ゆ足温器置きてわれの席あり

高砂百合の実の枯殻は瓶にあり幾月われは庭を歩まず

弓を切りて作りくれたる杖のあり広き廊下を歩みてもみよ

土の上にいまだも降りず天つ日の隈もなくして冬に入りゆく

冬の日の縁にさす光を浴みてをり磚の隙には紫すみれ

今日もまたわれは寝椅子の上にして楓黄葉のかがやきの中

破れ垂るる芭蕉葉にさす晩秋の光見てをり思ひ忘れて

人の掌に撫でて貰ひて生きてをり半纏の右の肩破るるまでも

薮茗荷の紺の珠実のつやつやを屋敷めぐり来し翁の手より

歩まざるわれに見しむと裏庭の黄のひといろの銀杏の葉の枝

昭和61年3月号作品

大須賀寿恵

ソックスを穿くに朝々凭れかかる洋服ダンス古びたるかな

浄誡尼病みてゐますか庫裡の土間の手桶に匂ふ紫罹欄（アラセートー）花の花

本宮の山たちまちに見えずなりて粉雪白く舞ひはじめたり

洗場に女等の話題聞えくる今朝は北方領土返還のこと

送らむかと云ふを拒みてひとり通る夜半の墓石あたたかき処

洋蘭（シンビジューム）の花ほぐれ来ぬ水苔にわが汲み立ての水を注がむ

競売（オークション）にて求めし抹茶を手作りの冬の茶碗に点てむと思ふ

今日のことは今日にと起きて今朝のわが室温を書く三年日記に

山下橋渡りしところに立札あり「高市連黒人ゆかりの地なり」

窓に寄りて糸を通しつつ半襟をかけ終りたりただ一枚を

昭和61年3月号作品

夏目勝弘

思ふこと多きは齢のゆへならむ布団に入ればたちまち眠る

年賀状区分に疲れて寝てをりぬたった一日の正月休み

塔婆忘れ母の墓に来てけり寒塔婆戒めるに我は便乗せむ

歯の浮きて物の食ひづらき日の続く只管に涙ながしつつ食ふ

叔母の墓に参らぬ報ひと諦めむ我が持ち金を落ししことを

電車待つ間ホームに思ひをり落ししは一週間の吾の昼食代なり

貯金するに何故生年月日が必要かと怒れる客をわれ宥める

万円券向きを正して揃へゆく福沢諭吉の顔が憎らし

己が財布に入れば頼もしき福沢諭吉停まる時のいと短かくて

道元は商人なりやと思ひつく母の塔婆を受けゐる寺に

昭和61年3月号作品

蒲郡　岡本八千代

幼らの赤色黄色それぞれの歯ブラシ覚えてわがしまひおく

また常の二人になりたり夕餉には木綿豆腐の湯豆腐一丁

湯豆腐の湯気仄仄とたちのぼり二人の夕べたちまちに過ぐ

きのふ着し喪服の白き長襦袢われたたみをり花莫蓙敷きて

新しき化繊の白き半衿を喪服の長襦袢にまた刺しおかむ

皮赤きを撰りて甘藷を買ひてきぬ今夜は焼芋を焼かむと思ひて

アルミ箔の銀に光りて夫とわれの焼芋二つ焼くる匂ひす

寒の雨待ち焦がれつつ日の過ぎぬ確定申告にも行かねばならず

囀りにならざる声の鶯の一羽を夫としばし見てをり

よく見ゆる眼鏡に変へ読み始む「方竹の蔭にて」の中津のフグより

昭和61年4月号作品

こがれ待ちし椿の蕾まだ小さしわれは名づけむ八千代椿と

いただきて八年ながしやうやくに八千代椿の三つの蕾

米国（アメリカ）より帰り来る人を待ちてをり雨水の日の雨降りやまずして

棚尾まで駅の名を記しつつわれは来つ棚尾の次は玉津浦といふ

捩（もぢ）り袖の着物短かめに着て君は棚尾の駅にわれを迎へし

赤鬼青鬼

豊川　弓谷久子

節分の先取りと子が呉れ行きし助六寿司と大きなおはぎ

子の編みし赤鬼青鬼それぞれに表情のあり今日は節分

体温計子より受け取る体温を計るもくらしのひとつとなりて

昨日の寒さ今日は何処ぞ日向の縁に陽を浴びてをり

路地を抜け道を渡れば小さき原我の一人のこの散歩道

薮陰に今年も野水仙咲きてをり手折りて帰らむ去年と同じ

杖つきて歩みて行きぬ彼岸花の葉のみ繁れる薮陰の道

鉢植えの山茶花最後の一花が遂に散りたり美しきまま

日記帳にはさみ置きたり山茶花の最後の一花真赤き花びら

梅の花咲き初めしかと訪ね見る三年ぶりか奥山の道

五分咲きの花眺めつつ見渡す限り梅の木なりし昔を憶ふ

昔砦のありしあたりは広びろと駐車場にとなり果ていたり

子供等がざりがに捕りし古池も埋め立てられぬ面影も無し

天正十八年ここに砦が作られたりと書かれていたり古墨の跡地

季節も変る世も移りゆく詮方も無き流れなり如月も逝く

スケッチブック

東京　今泉由利

物質は温度により個体液体気体プラズマ変化をすると
見ゆる星見えざる星々宇宙の星と同じ素質をもつと人間
一四六億個の脳細胞を持つ人間一個なりとも減らさぬように
未使用のスケッチブックも並べあり私の本棚進展止む
どこまでもどこまでも出掛けゆきスケッチブックに残ることごと
人体美学と人の姿を描きこしその美しさを心にとどむ
厳寒の奥伊吹山系の伏流水「勝利の酒」をいただきしこと

はるかなり加藤清正公の「勝利の酒」を大谷投手投球中

これ以上美しきことを知らず大谷投手の投球フォーム

マメ科なる蘇枋木の色素にて母の好みの紅紫の着物

染井吉野の桜の花の咲き初むるありがとうの心満ち満つ

「ひとりしづか」の花咲きゐでるひとり静かに見てゐる静かさ

瑠璃子姉の住みをりき恵比寿にて遅すぎたこと取り返せない

風景をスケッチをクロッキーを描きしページの端々に落書

応神天皇の百済より「論語」「千字文」漢字伝来はじめ

春めきて

豊川　安藤和代

如月の野は幾分か春めきてひよの声すらやさしく響く

大原はワラの鉢巻きゅっとしめ整列白菜姿勇まし

白寿なる姑送りて子は三人孫十人とぞ従妹あっぱれ

手紙など時代遅れと笑うなかれメールにはなき心が通う

スーパーの笊に盛られしさんフジの故郷恋うがの紅のまぶしき

息荒き力士に向けるマイクあり待ってあげてよ貴景勝好き

年末に活けし紅白梅の香の流れて明るき大寒の朝

喜びか悲しみかとも一合の水に浸せし米のつぶやき

「卯」を描けば「子」にも見えます初便り初笑いする仲よしこよし

孫が来る腰の痛みはどこへやら好物ゼンザイ豆煮上りぬ

胡麻和えの菜花に小さき花芽見え夕餉の卓い小さく春盛る

幼あやす如く朝餉の味噌汁に八丁味噌をゆっくり溶かす

いつしかに雨は雪へと変りたり遠住む孫を案じいる窓

トラクター耕やしてゆく春畑家来の如く烏つきゆく

佳き事を重ねて家運伸びゆきぬ今年も五葉みどり鮮やか

庭椿の

春日井　清　澤　範　子

不注意にて右足くるぶし骨折す娘(啓子)に面倒かけてしまふ

ストーブの赤く燃えるは暖かく娘(啓子)と一時すごしぬ

娘の手を握りイチニイチニと歩を進む朝鳴く鳥に癒されながら

抗癌剤の薬はカペシタビン３剤と吾は大腸検査を受けぬ

市民病院へ行くはその都度採血があり結果の出るうち一時間待つ

庭椿赤白混じりの花三つ娘の便りに嬉しくなりぬ

最低気温一度と伝う小鳥はチッチと鳴いているよ

テレビ体操の女性は二人あと一人体操のお兄さん黒いタイツを

市民病院へ行くはその都度採血があり吾の血管細くて心配

車椅子での採血はそのまま採血台に乗せ手をぐっと握り針をさす

剪定の終りし苔のつきたる庭木夕日が静かに沈みゆくなり

冷え込みし朝日は明るく差し込みて貝塚の苔光り輝く

病院へ行く日決まるも毎週の日の続きいて娘も疲れる

S状結腸癌の薬は青色にてカペシタミン三剤をのみ始めたり

市民病院にて大腸カメラの日も決まり体調管理に気を付けるなり

千両の朱

豊川　山口千惠子

はためける薬師如来の幟旗スーパー脇の小さき御堂

思ひつきし一つ言葉を書きとめむ今朝の折込広告の裏

氏神の鳥居の脇にひっそりと目立たず咲きゐる蠟梅の花

堤防の枯草きれいに刈り取られ流れ清らか立春の川

瓶にさす水仙ほのかに匂ひゐる厨の流しも前に立ちし時

縁側の日向に爪を切らむかな使ひなれたる爪切り出で来ぬ

薮椿の蕾付きたる剪定枝散歩の道に一枝拾う

庭隅に一人生えなる枇杷の木の勢ひ増しぬ高く伸びゐる

冬の草庭に小さく芽生えゐる手鍬にかきゆく楽しみながら

暖かき日射しを背に受けながら庭の冬草手鍬にかきゆく

一カップの大豆を水に浸しをく味良く煮むよ五目豆煮む

カマキリの生みつけし卵枝先に枝撓めつつ啄む小鳥

千両の朱き実すべて喰ひ尽くし小鳥らは冬を過ごしてゆきぬ

百均の店を巡りて見つけたるサンセベリアの苗を買ひたり

この寒さに枯れてしまひぬ折鶴蘭芽生えを待たむ水そぞぎゐる

家に居て

蒲郡　杉浦恵美子

家に居て眺むる限り雨も佳し況や早春梅に降る雨

年甲斐もなく心待ちしたりけり節分寿ぐ年中行事

愛らしさにマイヤーレモン求めたり目の醒む黄色がつるつるまろい

愛でし後如何に用ゐん当てはなし六個もあるぞマイヤーレモン

近ければ徒歩にて向かふレストラン坂の向ふの海に満月

立春は過ぎぬ幸ひ風もない歩みも軽し食堂への道

寒くないただそれだけで胸がすく漸く今年の希望も兆す

新聞の旅広告に目が留まるこんなところにも春が来てゐる

旧姓を問はれて何故かまごつきぬもう何十年も使はざりしは

我が事のやうに憂ふる報道の去年泊りたる旅館の不正

延々と続く廊下のその先の湯殿の窓のレトロな硝子

二万歩も歩きし後の脚の疲れ癒して呉れぬその温泉は

何十年暮して居ても初めての上の郷城址は蜜柑畑の上

上の郷城址に立てば鵜殿氏の眺め其の儘犬飼湊

何ひとつよいことなしと思へども菜の花畑は今花盛り

春の訪れ

大阪　伊藤忠男

黒竹の隣りで咲くは桃の花昔変わらぬ原谷の春

耐えて耐えしなりながらも元戻るしなやか竹にあやかりたしや

沖縄と和歌山繋ぐ桜花春を待たずに満開なりや

一月のメリケン波止場雪景色今は一面緑の芝生

雪解けの中から芽出す若草の初々しさに目を細めたり

朝冷えも日差し優しく暖かな今日の一日予感するなり

何があり何が起こるも花が咲く弥生の月は華やかなりや

こころなし足取り軽き小鳥たち庭の小池を飛び移りたり

紅梅の根元に咲いたフクジュソウ幸せ運ぶか我が家の庭

京都から太宰府からも和歌山も梅咲き誇り春告げるなり

松明に声明（しょうみょう）響く二月堂春は間近か夜空を燃やす

送る先あちこち分けて荷積みする引っ越し季節この月の月

浮き沈み誰しもあれど進む先そこには未知の夢溢れてる

動画にと題材撮りに里歩き出会う村人温かきこと

出会いより別れが多き歳ならば出会いの機会逃すまじとて

道端改修

豊川　白井　信昭

星越の勾配きつき道かえて海岸通りＲ２３ゆく

道よりは御津海岸の松林遠く見えしも今は昔に

ここよりは山に上る道山茶花のここだも紅く今を盛りと

梅田浜防潮堤下人住める別荘屋敷の静寂の中

あれから二十年たち行在所跡三河アララギ碑今年七十年

御津屋敷文明ダチュラ磯夫ダチュラと咲き継ぎて我に一本頂きしこと

嫁と孫それぞれのチョコ手作りと一袋づつ我にくれたり

二人して思ひもよらぬ贈り物バレンタインデー明日に控えて

角口の車の中の日だまりはわが指定席朝刊を読む

一面の大き見出は見曾有（みぞう）の『トルコ・シリア大地震』とぞ

六日より二百九十六時間奇跡とも瓦礫の中から三人助かりし

被災地の昼夜を問わぬ懸命の捜索救助いかに堪えしや

わが角の十字路にして横の道対面通行時（とき）に待ち合わせ

道沿いに掻き出す砕石多くあり道端深く埋め均しゆく

片側の一枚田なる道端に土入れながら土端（どは）たたきゆく

雲の向こうに

埼玉　矢崎直人

春の雲月も富士山おぼろげに霞かかりて雲の向こうに

立春や資格の教科書段ボール一杯届き棚に並べて

必要な専門の知の実用の活かして用ふ知識の力

来週が始まる準備出来てるか気持ちを高め力は抜いて

警察の訓練パトカー白バイク河川敷にて整列乗車

治水橋群馬と秩父の山脈と富士の聳ゆる荒川渡り

研ぎ澄ます心の奥の深くまで重い思いの届くとこまで

受け止める伸るか反るかは分からぬがまず受け止めて春が始まる

コロナ禍が落ち着き始め動き出す世の中少し動き始める

行き慣れた道は段々短くに未知なる道はゆっくり歩く

見かけでは分からぬ悩み日常を深く見詰めて見つけらるまで

震度六震度七では一違うその一の大きさ雲泥の差で

千両の実をのせ万両吊り下げて鈴生り南天熊笹群れて

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

市電降り東八町の交差点今日(けふ)も窓越しに媼(おうな)座り居り

市電より降るる人たちかき分けて今朝も媼に会釈する我

手招きし媼は我に渡しくれる紅白厄除タンキリの飴

伊藤晴江

親の縁薄き叔母逝く年の暮その幼き日思へば哀し

孫からの似顔絵胸に旅立つ叔母その顔満ち足る夫子(つま)等守りし

轢かれゐし鳩の残した爪と羽根明くれば道の模様となり果つ

水野絹子

今春に受験生なる孫達にわれの成せるは祈ることのみ
十年に一度の寒波襲来す送りし荷物予測の立たず
四日も遅れわれの作りし甘酒は荷物の中にて発酵進めり

牧原規惠

潮の香を微かに含み半島は密かに暮るる冬の侘し雨
目覚むれば引き戻さるる現実にまづ考へる今日の献立
五歳児が老母の頭なでなでし「元気でいてね」と言ひ帰りゆく

稲吉友江

落葉たち風のなすままスピンしつつ私の車を先導するごと

指揮棒のひと振りにていざ「歓喜の歌」フォルティッシモの疾く響きくる

西方の空の半月黄の月今年最後の光はなちて

鈴木美耶子

池坊の理念に添ひて道歩む出会ひはいつも人、花、自然

裸木となりたる庭木のその中にさへづりの声誘はれて我

御節作り来たる皆の顔浮かびくるこの味好む神在の味

吉見幸子

長寿課の試行貸与のロボットは「エモちゃん」といふ窓辺に据ゑる
ロボットは十五センチほどの雪ダルマ機械の声はだんだん好きよ
「おはよう、気分はどう？かわりはない？」と同じフレーズ何か安心

牧原正枝

大楠の木も囀りも今はなくたゞ寒風の過ぎゆくばかり
寒風の通り道となりそこかしこ楠の木たちの切られし今は
楠の木の切り株残る崖の下かつて川あり蛍も見しかな

森厚子

バサバサと幾つものV字つくり行く冬鳥の旅のまた始まりか
躓きて寝転び見たり空の青澄みわたりたる冬の青さよ
日のささぬ冷たき朝の散歩道鳥の羽音に驚き見上ぐ

山﨑俊子

現代学生百人一首

東洋大学

父親のゴボウのような細い腕冷たくなるまで握り続ける

長崎市立長崎商業高等学校三年（長崎県）　佐藤（さとう）　陽菜（はるな）

言葉の矢真上に放てば分かるはず矢は落ちてくる自分の元に

熊本県立小川工業高等学校二年（熊本県）　井村（いむら）　望愛（のあ）

スマートフォン下向き歩きやってると見えなくなってる人と青空

沖縄県立豊見城高等学校二年（沖縄県）　宮城（みやぎ）　菜々星（ななせ）

くやしいなバス行っちゃった時計見るかさにポツポツふってくる雨

トスカーナ日本人会フィレンツェ日本語補習授業校（中学）二年（イタリア）　奥田（おくだ）　美亜（みあ）

さむいのに部屋でむずむずどうしたの体が外へ出ようとするよ

木更津市立請西小学校五年（千葉県）　熊倉（くまくら）　悠香（ゆうか）

この秋も今か今かと待っている鼻をくすぐる金木犀を

白百合学園小学校六年（東京都）　大川（おおかわ）　珠佳（しゅか）

作品のタイムカプセル美術館変わらぬ心未来に繋ぐ

白百合学園小学校六年（東京都）　河本（こうもと）　紗柊（さしゅう）

青色を食べて冷たいかき氷溶けて近くの海ふたつあり

白百合学園小学校六年（東京都）　鈴木（すずき）　愛弓（あゆみ）

『俳句』

足跡を盗まれてをり雪女郎　植村公女

幾度も窓明けてゐし春の雪

外套の衿立ててよりエトランゼ

あかぎれの指紋に惑うスマホかな　木村歩歩

鬼が来て撒く豆足りず福遠し

春立ちて子犬の覗く古墳塚

殷春に金文知るや博古館

刈り込んでもうすぐ野焼きすすき野は

春寒や薬師如来の跏趺坐　今泉如雲

佐々成政（なりまさ）の裔（すえ）とや大き鰤カマを

境内は白一色や一の午

鬼やらひコロナにやつと投げつけり

春の雨予報よりはや降り始め

春曇り防災訓練進化して

春の月廃墟の重機見る夢を

春眠や各駅停車終点

矢崎直人

如月の光の中へ静静(しづしづ)と

釈尊の入滅の日よ心して

雛壇は勉強机の上にあり

ささ波の消えゆくところ茸の角

寂しさの心に直(すぐ)立つつくしん坊

土筆(つくづくし)車窓の一本遠ざかる

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

雄山

妙高の残雪残る国境
親いなく生家の匂い残りけり
散歩道蝉の亡き骸秋近し
旅緩和仙石原にマスク咲く
妻恋し二十余年の秋の風
秋近しトンボの羽を運ぶアリ
布団干し「ふと」妻思う春の朝
春来るレジ袋消えワンプッシュ
夏休み孫といっしょに墓参り
台風に信玄治水の広瀬ダム

恵風

吟友とバス旅楽し春の風
北風のバス待ちつらし吟帰り
春の宵友とかたる日旨酒と
淡雪に老木耐えて紅の梅
バス待ちの北風寒しにらめっこ

池の鯉そろりと動く寒の明け
春めくや手元くるいし花芽切る
皿市の懐寒し梅まつり
駅降りてとぼとぼ歩く朧夜を
冴返る差し出し名見て涙する
コロナ禍で案山子頑張る稲穂かな
コロナ禍で一人楽しむ初稽古
初孫の「みてね」たのしむ大晦日
山茶花や亡犬の家未だあり
雪催い老夫婦らに我れ抜かれ

秋山

ギンヤンマこの肩とまる庭先で
秋の虫ジイジイジイと我を呼ぶ
風が舞う土の中からふきのとう
ふりむけば蕾はじける初桜

金子

春風の友と語らうここち良さ

貴山

五感を澄ませば（10）

杉浦恵美子

春はあけぼの

昨年暮れ、以前から憧れていた鹿児島県の温泉宿に念願叶って一泊。翌朝未だ暗いうちに露天湯に行ってみました。館内外の広々とした浴槽が売りの宿とて開放感あふれる湯舟に浸っていると、一年の疲れや愁いが湯に溶けて行くようで「よくぞ日本人に生まれけり」と至福の心地。

やがて東雲。海の彼方を眺めていると、桜島であろう方面に棚引く雲が赤らんでいます。刻々と茜色が濃くなって太陽が今にも顔を出しそう。同時に、それまでは照明が頼りだった辺りの様子もくっきり見えるようになっていました。普段こんな時刻に外にいることはないので空気も景色も新鮮。

ふと、「枕草子」のあまりにも有名な冒頭が口を衝いて出て来ました。

「春は曙。やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

ああまさにこんな感じ。尤も季節は全く異なりますが。

続いて厳かな日の出を拝んだら「画竜点睛」となるところでしょうが、もう限界。これ以上浸っていたらのぼせてしまうと、早々に引き上げてしまいました。

清少納言だって日の出前の僅かな（何十分程度の？）時間の移ろいの視覚的変化の妙こそ眼目だったのでしょう。

さて、こんなことにも思い至りました。

清少納言はこの景色を一体何時何処で見たのだろうかと。

たった一度見た光景を文章に昇華させたのではないのかと。

長く住んだであろう都で見た光景？宮廷若しくは私邸から見える曙の様子や山って比叡山方面？或いは何処かへ旅した時の景色？

勝手な想像は尽きませんが、そもそも「暁」「東雲」「曙」等の区別を知らない現代人と違って、当時の人々にとっては案外日常的に見慣れていた光景だったのかもしれません。

それと逆にこんなことも思い付きました。

見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ　後鳥羽上皇

この和歌は、清少納言の時代より約二百年後の鎌倉時代『新古今集』所収。

下の句の「夕べは秋となに思ひけむ」を口語訳すると、「夕べの情趣は秋に限ると何故思ったのだろうか（春の夕暮れもそれに劣らぬ趣があるのに）」

これは和歌修辞法の一つ、本歌取りの一種、本説取りの技法を使用しているようです。

つまり「枕草子」で「秋は夕暮れ」と言い切られて以来何百年、歌人たちは挙って秋の夕暮れの素晴らしさを歌い上げてきたけれど、春の夕暮れだって見どころがあるじゃないかという、少々皮肉な歌なんです。

言い換えれば、「春はあけぼの」「秋は夕暮れ」という極め付けが後の人にどれほど影響力があったかということ。

特に「秋は夕暮れ」などは例えば「新古今三夕の歌」として人口に膾炙されているものもあるほど。

そう言えば序段は春夏秋冬すべて末尾を省略することによって断言しているため、和文特有の朧した表現は一切なく、当時とすればさぞ斬新な文体だったことでしょう。もちろん現代の我々にも説得力があります。

もう一つ近代短歌から

春曙抄に伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるかな　与謝野晶子

「春曙抄」とは北村季吟による「枕草子」の注釈書。「伊勢」は「伊勢物語」。中でも「春曙抄」は「枕草子」を印象付け、さらに春の気だるい雰囲気を醸し出していて、さすが古典文学に造詣の深い与謝野晶子ならばこそ。こういう取り入れ方もあるのかと舌を巻きます。

このように、気付かぬうちに古典が私たちの思考や表現に取り込まれていることを意識すると、何とほっこり豊かな気分になることでしょうか。

千年も昔の感性口を衝く春はあけぼの出湯に浸りて

附　録（十）

矢　崎　直　人

鬼やらひコロナにやつと投げつけり

二月三日の節分に職場で豆を撒きました。外に向かって撒く豆にコロナ禍の鬱憤をのせてやるという気持ちになりました。冬の冷たい風が変って行くのを感じます。人や物が動き出し始めるのを感じます。春がやっと来たという思いで豆撒きが行われて来たのではないでしょうか。特に今年はそれを実感しました。

【夢見重機】

トルコ・シリアで大きな地震がありました。５万人を超える死者が出ている大災害です。一九九五年の阪神淡路大震災と二〇一一年の東日本大震災で直接被災はしませんが、テレビの映像や写真で瓦礫でトルコとシリアの様子が報道を見ると他人事とは思えません。

春曇り防災訓練進化して

防災センターで火災と地震の訓練に行きました。消火器の使い方を習い体験してみたり、煙の中を逃げる訓練、

地震の揺れの体験、ＶＲの映像を使った火災現場の避難体験など充実した内容でした。震度六と震度七では揺れの大きさがこんなにも違うのかと驚きました。

震度六震度七では一違うその一の大きさ雲泥の差で

日が少しずつ伸びてきて夜になると春の宵は冬とは趣が異なり、月も空気に湿り気を帯びて来て霞がかかったふうに見えます。近所に移転して廃墟となった商店がありました。昼間は活発に動いていたであろうブルドーザーやトラックが、夜になると静かに佇んでいます。機械に意思があって勝手に動き出す、何てことは現実には在り得ないのですが、その重機を見ている時にふと今にも動き出すのではないかと感じました。

朧月の柔らかい光に照らし出された剝き出しの壁や鉄筋に反射して、オレンジ色や緑色の車体をそんな風に見せたようです。

『運転免許証自主返納』

中屋保之

申請による運転免許証の取消し（自主返納）制度が、一九九八（平成十）年四月に導入されて久しい。私も昨年、後期高齢者の仲間入りをするにあたって「自主返納」した。幾つかの理由がある。更新条件に〝記憶力テスト〟と、二〇二二（令和四）年五月から実施された〝更新時、七十五歳以上の高齢ドライバーを対象とした実車試験（運転技能検査）〟の受講義務の忌避である。何人かの先輩諸氏は自身の記憶力や運転技能の確かさを誇らしげ（？）に語ってくれた。私は、その両方とも万全の自信が生じなかった。また、子どもたちの独立や家族の在宅介護等でハンドルを握る機会が激減していたという事情もある。

二〇一九年四月、東京都豊島区の交差点で、当時八十七歳だった高齢者が運転する乗用車が暴走。自転車で横断歩道を渡っていた女性（当時三十一歳）と長女（同三歳）が死亡し、男女九人が重軽傷を負った事故は、私のなじみある場所で起こった。高齢ドライバーの事故対策の必要性が改めてクローズアップされ、翌二十年六月の道路交通法改正につながった。昨今でも、高速道路での逆走や、アクセルとブレーキの踏み間違いによる事故が少なからず高齢者ドライバーが起こす事例として報道されている。その加害者の誰でもが、事故を起こす直前までは「私は大丈夫、事故などとは無縁」と思い込んでいたのではないか。私の周囲にもそんな加害者予備軍がいる。共通するのは家族や友人の助言・心配を無碍に断り「私は大丈夫、事故などとは無縁」としているように思える。

これらの事例は、交通量の多い都会での出来事ではあるが比較的交通量の少ない地方都市や諸条件で車が必需品となる方々にとっても、高齢者ドライバーとしての自覚が必然といえよう。否、老若男女を問わず「私は大丈夫、事故などとは無縁」ではないということを運転免許証を保有している全員が再認識し自覚する必要がある。

満十八歳になったばかりの夏、私は運転免許取得のため近くの教習所に通った。そこで、出合った教官に素晴らしいことを教えてもらった。「うまい運転は教えないよ。同乗者に安全で安心してもらえるような運転を習得してほしい」といった彼は、助手席のダッシュボードに水の入ったコップを載せて「このコップの水がこぼれない様にスムーズな運転技術をマスターしようね」と導いてくれた。それでも、免許取得後、この意味を理解するには相当な時間がかかった。若気の至りで、イライラから車間距離を詰めたり、無理な追い越しで対向車とぶつかりそうになったりで、同乗者にひやひやされたことが度々あったと、今にして反省している。そんな私が、この教官の教えを再認識できたのは、子供たちが免許を取得して私を助手席に乗せだした頃である。やっと「コップの水」の意味が理解できてきた。

それを口が酸っぱくなるまで、子供たちの耳にタコができるまで繰り返し伝えたつもりである。それでも、娘はともかく息子の方は私に似て短気な運転仕様で心配した時期もあったが、この頃は慎重な「同乗者に安全で安心」してもらえる技術を習得したようである。教習所の教官に感謝‼である。

楽しい時間　125

山本紀久雄

2023年2月28日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十

明治6年（1873）の西郷隆盛ならびに西郷支持派の参議（江藤、後藤、板垣、副島）が辞任した征韓論政変から、明治10年（1877）までの日本国内状況を簡単に整理してみたい。

「明治5年（1872）12月3日を以って、明治6年1月1日とする」と、明治5年11月9日に改暦詔書が下され、太政官布告が出された。つまり、それまで使われていた太陰暦が廃止され、太陽暦となったわけである。時刻法も従来の一日十二辰刻制から、一日24時間の定刻制にすることを布告した。布告から施行まで一か月もないスピード実施であり、しかも十二月（師走）がわずか2日で終わった。当時の人々のあわてようは想像に難くない。

このような荒技・劇的変化もふくめ、新政府は矢継ぎ早に欧米にならった近代化を推し進めた。廃藩置県・地租改正・断髪令・徴兵令。さらに、神仏分離政策により、路傍の神仏を撤去し、時には合祀したり、神号を変更したりと、それまで民衆の慣れ親しんだ世界が上からの改革で、有無を言わさず変更されていった。

民衆の多くが、これからの生活に不安を覚え、政府に不信感を抱いたとしても無理はなく、発生したのは新政府反対一揆である。特に、西日本一帯で数年に渡って続いた明治6年の筑前竹槍一揆の参加者は十万ともいわれ福岡県庁すら一時占拠されるほどで、一揆は、政府の進めた文明開化政策のありとあらゆる出来事を、廃止の対象とした。

その頂点は明治9年（1876）の三重県伊勢暴動と、茨城県真壁騒動で、地租改正反対一揆の代表とされ、結果として明治10年新年の4日、民衆負担軽減のため、地租を地価百分の三から、百分の二分五厘にすると天皇によって発表された。いわゆる当時「竹槍でドンと突き出す二分五厘」とうたわれたものである。政府の歳入減少は、行政の経費削減という結果になり、天皇は各省庁に歳出費用の節減を命じた。このように各地での一揆と、士族反乱がより深刻な局面を示していたのが、明治10年の西南戦争までの日本国内状況であった。

この状況の中で、明治10年に入った26歳の天皇は、突如として「ひきこもり」とも「ウツ」とも見られる症状を示し出し始めた。その状況を明治10年新年から探っていく。

1月4日、地価軽減発表と同じ日の明治天皇紀に「乗馬あらせられる」と記載がある。通常であれば、取り立てて触れるほどのこともない乗馬は日課の一つである。しかし、天皇はこの日から取り憑かれたように馬に乗り始めた。ほとんど連日、午後二時から日没まで励み、この月の後半から京都への行幸中もこの日課は変えなかった。

何故に乗馬について触れたか。それは天皇の日課が今までと異なる状況になってきたタイミングと、乗馬の熱心さとが合致しているからである。

その第一は、この時期、閣僚と会うのを努めて避けるようになったことである。

その第二は、この時期、予定された学問の日課を避けるようになったことである。

1月24日、大和国及び京都行幸へ出発した。行幸の公式目的

は神武天皇畝傍山東北陵の参拝、また孝明天皇十年式年祭による後月輪東山稜の参拝にあり、京都、奈良にある歴代天皇の御陵参拝も予定し、海路をとり、1月28日に神戸港に到着し、京都の御所に入られた。

1月29日、天皇が京都に入った翌日、鹿児島では私学校徒が陸軍火薬庫を襲って弾薬を略奪し、西南戦争の口火が切られたのである。

これらについて、明治天皇は報告を受けていたが、東京に帰る気配は示さず、そのための陣頭指揮をとる様子も示さなかった。

その代わりに、京都で学校訪問、勧業場、舎密局（化学技術の研究・教育、および勧業のために作られた官営・公営機関）など様々な工場や、加えて牧場まで視察し始めた。

このような行動をとっている明治天皇の心境、それをどのように推測すべきか。

鹿児島では今まで最も信頼していた西郷が謀反を起こしかけている。だが、その事実を知りつつ、謀反への対策を指示せず、ひたすら巡幸の日程をこなしている。

2月14日、西郷の命令で鹿児島軍が熊本進軍を開始した。西郷軍が熊本の県境を越えたという急報が届いた後もなお、天皇は京都で巡幸を続けていた。

2月21日、西南戦争として実際の火蓋が切られた。熊本に攻め入れようとした西郷軍に対して、城兵が砲撃を加え開戦となった。

3月4日、大阪の内閣出張所（征討事務本部）から京都に戻った木戸は、西南戦争が政府軍有利に傾きつつあると天皇に報告し、天皇は安堵しつつ西郷の心中に思いやった。

戦争が始まって以来、天皇は戦争以外のことは何も考えることが出来なかったように見える。拝謁者引見の時を除いて、めったに御学問所にも出御しなかった。

7月28日、天皇は京都を発ち東京に戻った。それまでに天皇が東京に戻ることは何度も延期されていた。熊本、鹿児島で戦っている政府軍の士気が衰えることを恐れたからである。しかし、戦争の大勢が決した今、政府の機能が東京と京都に二分されていることは不便であり戻ったのである。だが、東京でも明治天皇は政務に不熱心なことは変わりなかった。

9月24日、西郷は最後の拠点である城山で、別府晋介を顧みて「晋どん、晋どん、もう、ここらでよか」と言い、将士が跪いて見守る中、襟を正し、跪座し遙かに東に向かって拝礼した。遙拝が終わり、別府は「ごめんなったもんし（御免なっ給もんし＝お許しください）」と叫んで西郷の首を刎ねた。西南戦争が終わった。明治天皇は、西郷の起こした西南戦争の要因に対して疑問を持っていたからこそ、政務に熱心に取り組まなかった、いわばサボタージュであって、それがひきこもり状態、ウツ状態としての態度になっていたのだという説もある。

しかし、そうではないという見解も当然にある。明治天皇がウツ状態になったのは、自ら征韓論政変を調停できずに西南戦争が起きてしまったので、日本の行く末への不安に加え、自分の無力さを感じたからだというもの。

いずれにしても、西南戦争は明治天皇にとって、その生涯における精神的な鍛練期間として貴重な事件であった。この間、鉄舟は東京においてひたすら侍従としての任務と、自らの人間完成に向けて厳しい修行の毎日を続けていた。7月、東京に戻った明治天皇は、ひたすら修行している鉄舟を見て、何を感じたのであろうか。

次号へ続く。

『酔いの徒然』（一三二）

丸山酔宵子

『イーハトーブ・盛岡を訪ねて』

今、みちのく盛岡が俄然、脚光を浴びている。

２月初旬、米紙ニューヨーク・タイムス電子版が『２０２３年に行くべき世界５２ヵ所』に盛岡がロンドンに次いで２番目に選出された。

「東京から短時間で行け、人混みを避けて歩いて回れる珠玉の街」と紹介されたのである。

同紙によると、外国観光客は東京、大阪、京都が脚光を浴びて、東北の地方都市の盛岡については見逃されることが多い。しかし、大正時代の和洋折衷の建築物や伝統的な街並み、川が流れる自然が満ちていると絶賛している。

「そうか・・・盛岡ね・・。宮沢賢治・・・」

思い立ったら即実行。ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイングに早速予約し、東北新幹線で一路、盛岡へ。

思い立つイーハトーブは冬の里

酔宵子

６０歳以上が入会できる「ＪＲ大人の休日・ジパング倶楽部」のメンバーなので、先ず東京駅「みどりの窓口」へ直行。

１１時３６分発「やまびこ５９号盛岡行」自由席を購入。驚くことに、料金と言えば、実に３割引きである。

昼食は旅情豊かに社内でと、いつもの定番弁当である「横浜崎陽軒シュウマイ」をゲットし、ワクワクしながら「やまびこ」社内へ。

「やまびこ」は「はやぶさ」と違って東北新幹線の「こだま」のようなもので、各駅停車し、終点盛岡まで約３時間半である。

始発東京では、自由席もガラガラであったが、宇都宮ではかなりの乗客が乗車し、福島では立ち席が出るほどであったが、仙台でかなりの乗客が下車し、ガラガラの状態で盛岡に向かう。

新花巻あたりから白銀の世界が広がり、粉雪も舞っていて、いかにも雪国そのものである。社内も乗客の減少とともに、底冷えがしてくる。

底冷えの車窓遥かに岩木山

酔宵子

３時過ぎ、漸く盛岡に着きホテルにチェック・イン。

コンシェルジェに相談し、周辺の観光スポットと夜の繁華街についての情報もしっかり入手して、いざ盛岡散策の開始である。

ホテルの前を流れる北上川に沿った遊歩道を歩いて中心部へと向かう。歩道にはまだ雪が残り、もう既に夕刻近く、気温も下がりアイスバーン状態で、細心の注意を払って一歩一歩慎重に歩いて行く。

北上川を渡って材木町に向かうと宮沢賢治のレトロな街並みのイーハトーブ・アベニューが続いている。イートハーブは「理想郷」を意味する宮沢賢治の造語であるが、「いわて（IWATE）」をもじって造語したとのことであるようだ。

盛岡のもう一人の作家は石川啄木であるが、イートハーブ・アベニューを通り、県庁に向かう中央通りの盛岡高校を通り過ぎた途中に、盛岡で現存する唯一の武家屋敷の「石川啄木新婚の家」がある。

巨大な花崗岩の割れ目に咲く石割桜の隣が県庁で、正面玄関上の壁面一杯に大きな垂れ幕が掛かっている。

「必勝！　大谷翔平　佐々木朗希」そうです、二人とも岩手県出身なのであります！

県庁まで来るともう既に盛岡の中心地。北上川を眼下に白銀の盛岡城址が、夕日に輝いている。その対岸にはレトロな赤レンガ建築の岩手銀行本店が堂々と品の良い姿で佇んでいる。

白銀に夕陽が落ちる城址かな

酔宵子

日が落ちた盛岡の夕刻は矢張り「凍（しば）れる」。そんな時には、矢張り熱燗を求め、大通りアーケード周辺飲み屋街の散策である。長年培った呑兵衛の嗅覚、聴覚による「店選び力」には自信がある。

しかるべき縄暖簾酒場そしてオーセンティックバーで、しっかりと盛岡の夜を堪能。そして最後のスナックでカラオケを堪能したあと、ママの推薦で食べた冷麺の本当に美味いこと。

盛岡と言えば「わんこそば」であるが、どういうわけか、冷麺とジャージャー面を含め盛岡の誇る三大麺と言うそうである。

勿論、翌日、二日酔い甚だしい中、「わんこそば」の老舗「東本店」を予約して一人で「一人わんこそば」に挑戦したのである。二階座敷に通され、仲居さんの「ハイ、どっこい、ハイ、もー一杯・・・」の掛け声も空しく、二日酔いで惨憺たる枚数。仲居さんは落胆と軽蔑の表情で、あきれ返っている。

因みに帰り際に聞いてみると、テレビの大食い女性は、ぺろりと５００盃とのことでありました。

オリーブの鐘

高橋育郎

1

きいろい　ひかり
つぶらな　ひとみ
オリーブの実は　かわいいな
お日さま　にこにこ
みんなも　にこにこ
鐘が鳴ってる　うれしいな

2

風は　そよそよ
やさしく　ゆれて
オリーブの木は　うたってる
なかよし　みんなは
げんきで　あそぶ
鐘を鳴らそう　たのしいな

3

白い　十字の
すがしい　花よ
オリーブとおく　日本まで
平和の　とうとさ
つたえて　きょうも
祈りの鐘が　ひびいてる

4

月は　まるいよ
銀いろ　夢よ
オリーブそっと　ねがってる
あしたも　みんなの
えがおが　みたい
鐘がしずかに　鳴ってます

絹の話（１４９）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹と渡来人

絹が日本に伝えられたのがいつの頃かはっきりしませんが、長い年月に渡って幾度となく養蚕、繰糸、機織り染織等様々な技術が中国や朝鮮から伝えられて来ました。ある時は大和政権の招聘によって千人余の大人数で、またある時は戦乱を避けて渡来した人たちが幾重にも重なって、厚い絹文化を作ってきました。

主な人たちのルーツを探ってみましょう。

秦氏

秦氏は神功皇后が朝鮮半島の新羅を中心に攻めた三韓征伐をした後、（日本書紀によれば）秦の始皇帝の子孫で新羅に居住していたという弓月君に率いられて倭国に渡来した鉱山鍛冶技術、養蚕、機織り酒造等の数々の先進技術を日本にもたらした氏族で、４～７世紀頃まで断続的に渡来しています。

秦氏のルーツは中国の春秋戦国時代に黄河の奥地の西方（中央アジア）に一番近い位置にあり、絹を多く産する秦の国の機織の人達で、絹の交易で西の進んだ文物に日常的に触れていて、西方の機織り技術にも習熟していた「機氏」であったと思われます。

しかし秦が滅び魏、呉、蜀の三國時代になると、卑弥呼は日本から最も遠い魏の国に先端技術などの情報を求めて朝貢しています。その時卑弥呼は素朴な和錦を献上しますが、魏王から錦織り３反と平織白絹布１００反を下賜され、自国との織物技術の差に驚嘆したと思われます。三国の戦乱が繰り返される中国から、それを避ける為に日本にも織物集団など色々な人々が渡来したのです。

一方、九州阿蘇周辺の熊襲を征伐した神功皇后の息子の応神天皇の時代になると秦氏の色々な技術集団を積極的に招聘し、その技術的産物（特に絹）で周辺の豪族従え、秦氏の作る優れた金属武器をもって熊襲の南に大きな勢力をもつ隼人を服属させる事が出来たのです。

そこで、熊襲にも隼人にもにらみがきく豊後の秦氏の勢力拠点に神功皇后と応神天皇を御神体とする宇佐八幡宮が造営されたのです。

５世紀、雄略天皇の時代になると渡来人を重用して政権の強化を図ったので、秦氏は山城方面にも強力な拠点を作り、朝廷に絹織物を税として納めて仕えていました。秦氏の館にはいつも絹織物がうず高く積み上げられていたので、天皇から兎豆満佐の姓を賜り後に「**太秦**」と称

す様になりました。

7世紀になって秦一族の秦河勝は厩戸皇子（後の聖徳太子）のブレーンとして活躍し、当時の国際情勢、外交、通商、律令制、仏教など様々な事を教授し、大化の改新に繋がってゆきます。

特に綾織は秦氏の特技とも言われ、従来の綺（薄い上質な平織物）よりも紗紋が美しく、綾織物を着る人は華やかにも怪しくも見えましたので、後日「あやしい」という言葉ができた事を見てもいかに新たな技術であったかが解ります。この織物をする集団を「**綾部氏**」という様になりました。

服部氏

服部氏は大和政権が強大になり始めた古墳時代に政権がその権威を示す上で、その後朝服等の制度が制定されるに及んで、上質な絹織物を大量に必要とするようになり、秦氏よりやや遅れて、機織り集団として朝鮮（高句麗～新羅）から渡来し、政権の組織（伴造）中に組込みまれ、服部連として朝廷の需要に応ずる絹製品づくりに当った集団です。地域に服部連の技術移転が済むと（大化後）一部は大蔵省織部司に拘束されましたが、多くの服部達は全国の地方に分散して行き、地方の産業振興につくし、今日の服部さんになって行きました。

ただし、秦氏の技術集団の中の織物集団が機氏と言われる様になって服部となったという説もあります。

呉服部氏

服部氏にやや遅れて中国の呉の国から戦乱を避けて高句麗に居住していた高級織物集団を朝廷が呼び寄せ、伊賀や甲賀に土地を与え絹織物を納めさせたのが、呉服部です。この人達の日常着などから呉服が広まり改良されながら日本の着物に発展して来たと思われます。

彼らの次男三男らは兵役に従事して、戦国時代には忍者となって活躍した事は有名です。

神服部氏

大化の改新後天皇の衣装も伊勢神に奉納する御衣も専門職が携わる様になりました。

その専門職の一部の人達は天皇から「神服部」の称号を与えられ、平安時代の後期になって、彼らは養蚕が盛んで、素晴らしい犬頭白糸を納める東三河に移封されるのです。今日もその伝統は脈々と続けられています。

織部氏、錦織氏など

まだまだ絹に関わる苗字は沢山ありますが、またの機会にすることに致します。

「江上浩二の独り言」64

江　上　浩　二

さがしもの

目が疲れた、指先も疲れたなという声にもならない終わりだった。それはある日の夕方のことで、今は４－５時間経って、あるＴＶ番組を見終わって、70歳になった歌手の人生みたいな内容で、以前呟いた小椋佳さんが苦労して歌詞を考案する方法とは違ったやり方で歌詞を紡ぎ、作曲もする方のやはり苦労話に気が行ってしまったのである。その歌手は10代半ばで上京し、挫折の度に長崎という自分の故郷へ逃げ帰ったそうだ。私など、工場勤めの父の会社の横浜にあった社宅に生まれてから６年間、その後神奈川県の近郊に引っ越しそこに12年、東京の大学に入って大学近在で２か所下宿を変え、そのまま結婚したので棲みかも都内で、帰る故郷と言える町などはないなと、横道にそれた想いになった。

何故そんなに疲れたのかという理由についてお話するのが本流である。サラリーマンを早期に辞め自営業になって、早17年を過ぎようとしている。それからブログを書き始めて、そのブログのトップページの写真を変えようと決めて、そうだ２０１６年に海外出張へ行って報告書を書いた資料のトップページで使ったある写真を探しはじめていたのである。結果を先に言うと、さがしものの写真は見つかったのであるが、そのプロセスは壮大で、デジカメ写真の画像を何枚、いや１０００枚以上になったかもしれないのであった。

探そうとしている写真はサンフランシスコＳＦの急坂の道で、それもｂａｙ側から見たもので、近くの港から出船する好きなクルージングの船から眺めたものである。ＳＦには米国系外資企業のサラリーマン時代から毎年訪れていて、自営のコンサルタントになっても、顔を出すカンファレンスの種別は若干変わっても２００５年から２０１６年まではＳＦを訪れていた。毎年必ずクルージングの船に乗ったわけはないが、時間があると、ナパバレーのワイナリーツアーかこのＳＦの急坂が平行に８本も並んで見えるクルージングに出かけていたのだ。始めの頃はただＳＦには急坂が多く、サラリーマンがスケボーを蹴ってオフィスに行く様子などがフィーチャーされていた。自分でも、クルージングで始めから８本もの急坂が綺麗に平行に並んで存在し、それをフ

レームに収められるとは想ってもいなかった。実際、４本だけ急坂が並んでいて、その４本の組み合わせも撮った写真によりまちまちであった。

　最初の早とちりは、２０１６年のカンファレンス報告書だったので、２０１６年のデジカメフォルダーを見分したのだが、見当たらなかったのである。そこで、過去の年度のフォルダーも探したのだが、見当たらなかったのである。そうだ、その頃はデジカメの性能が急速に向上し、機種も一番古かった国産のＮ社のものからＳ社の機種へ、更にＳ社の機種で安価で使いやすいレンズ系のＦ値がやや大きい自分でＳ５００と呼んでいる３台をある時期混在して使っていたことを思い出した。現在はＳ５００を自分で、Ｓは家内が使っている事にはなっているが、皆

さんと同じように、性能が格段と良いスマートフォンのカメラ機能に頼っている。

　そんなこんなで、結局２０１４年のフォルダーにそのものは鎮座していたのである。何年にも渡りＳＦの急坂に向けてシャッターが押されていたが、８本も綺麗に並んで撮れていたのは実は１枚で、４本であったり、ｂａｙクルージングは私が個人的に興味を持っている８本の坂のことなどお構いなしに、都合の良い所でゆっくりと進んでくれることもなく、陸からの距離も私の頭の中のベストショットのポジホンに関係なく、行きかっていたので、ただボーッと遠目に丘が見えるだけだった。

　偶には私のとりとめのない、ストーリーのない独り言に、お付き合い頂いたことに、有難うと申し上げたい。ＳＦはこの８本の急坂が仕事上での私の故郷と主張しているのかなと想った。

令和５年２月記す

初狩便り（17）

花野みぷり

大犬の陰嚢（オオイヌノフグリ）

初狩の厳しい寒さや霜に耐えて、春一番に咲き出すのはオオイヌノフグリだ。畦や畑に張り付くように茎を伸ばし、低い草丈に小さな水色の花を咲かせる。可憐でかわいくて、大好きな花だが、名前が酷すぎる。こんなに可愛い花に大犬の陰嚢だって！　こんな名前を付けたのは誰だ！　調べてみたら敬愛する牧野富太郎博士だった。日本に昔からあるイヌノフグリに似ていて大きいことから命名されたとのこと。別名に太陽に当たって輝く花が星のように見えるので「星の瞳」もある。すてきだが、あざとい感じで普及していない。

オオイヌノフグリが咲きだすと追いかけるように、桜が咲き、ヒメオドリコソウ、ホトケノザ、タンポポ、ハコベなども咲き出し、春爛漫へとまっしぐらに進む。

そして土手には土筆（つくし）がにょきにょきと芽を出す。私は土筆が好物だ。袴と言われる葉の変形したものを取り除き、茎と頭だけにして、薄味でさっと煮て、玉子でとじる。ちょっと甘めが好きだ。あ～春の香り、春の味！

桜が咲いたら農作業は本格的に始動する。今年もおいしい米づくりのために、力を合わせ、愉しく働こうと思う。

（写真：菅野昌英）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2023年2月24日

花粉対策　①

スギ花粉がピークをむかえる前に
毎年恒例となっています花粉対策を書いていきたいと思います
先ずは外出時の服装について　です
花粉とウイルスは似ていて
付着の仕方も同じ感じです
花粉の方が大きい為　除去もしやすいし
防ぎやすかったりします
ただ数が桁違いに多いので油断禁物です
服装は
毛足が長い衣服は避ける（上着はもちろん肌着以外も）
髪の毛にも付着しやすいので帽子などもお勧めです
帽子などがかぶれない場合は
顔などに噴霧するイオンスプレーを髪やマスクなどにも使用することにより幾分か良いと思います
大切なのは外出先から室内に入る時です
玄関先や入口で必ず花粉を落とす習慣をつけましょう
室内で自分に付着した花粉が動きと共に舞い
被花粉するという事になります
本田カイロにいらっしゃる際も玄関前でちゃんと落としてくれる患者さんもいます
ありがとうございます
この習慣が花粉やウイルスを室内に持ち込む量を激減するので意識して欲しいところです
今日も笑いながら行きましょう

2023年2月27日

花粉症対策　②

昨日　夕暮れ時に歩いていたら
夕陽が美しすぎて思わず込み上げるものがありました
世の中が人工的になり過ぎたら
その分　感動も減るのかもしれませんね
今回も
花粉対策シリーズです
まずは　部屋の換気　ですが
花粉が多くなると部屋の中にたまってきます
そうすると負のスパイラルで部屋にいても
花粉を吸い続けることになるので症状が治まりません
そこで
朝の花粉の少ない時間帯に部屋を換気します（掃除機をかけたり）
その時に大切なのは　薄いレースのカーテンを閉めたまま
換気をするという事です
この薄い1枚が花粉の侵入を大きく防ぎます
空気清浄機を稼働してから窓を閉めましょう
そうする事により
換気で舞った花粉も減らすことが出来ます
ついつい花粉の侵入が嫌で換気を怠りがちですが
上手く朝の時間を活用して換気をして行きましょう
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「志は原動力」

人の命は精により
生命・活力湧き出てくる
精は命の大元で　肉体・精神作り出す
精から命の泉の気
志の気を発するぞ
志とは　人の本能と
命の欲求あらわすもの
元気の源　やる気と気力
欲の通りに活動し　満たせリャ命は喜ぶぞ
志とは　欲求発する気
心の方向　指し示し
命の原動力となる

人の欲求　３つあり
食と睡眠・性の欲
３つは精の為にあり
食欲　食べるを促して
気血を補充し　精を足す
食べたいものがあるならば
遠くへ行くのも厭わずに
動いて満たすが人の性
睡眠欲求　寝る事で
精が養う肉体と　脳や神経休ませりゃ
疲れの回復だけでなく
神経・細胞　発達し
新たな成長欲求が
生まれて　次へと動き出す
性欲　精を次世代に　残し育む欲求じゃ
男女や他者と交流し　新たな命が動き出す
会いたい人に　会う為にゃ
たとえ火の中　水の中
動けば　苦難も跳ね除ける

精から発する志と欲は
精を満たす為にあり
歳を取っても志
欲に素直に動くがよろし
心の示す方向に
元気な未来が待っている

「指先・爪先　肝刺激」

指先・爪先　筋の先
肝の機能と繋がるなり
肝は筋を主り
動きをつくる　働きなり
肝は朝から働いて
頭や身体を　動かして
起きて寝るまで　活動す

爪は筋余と言いまして
筋の先には爪があり
爪が弱けりゃ　肝弱く
爪が強けりゃ　肝元気
弱い爪の　指先の
筋をしっかり動かせば
爪はしっかりしてくるぞ

指先・爪先　刺激すりゃ
手足の動きは軽くなり
血流　よくなり温まる
冷え性　しもやけできる人

肝の血流悪い人
肝の働きあげたけりゃ
指先・親指　刺激せよ

指先・爪先　刺激すりゃ
脳まで　刺激がとどくので
目が覚め　眠気も吹っ飛んで
頭が働き　シャッキリす
指先　刺激し　動かせば
頭を刺激し　ボケ防止
脳の病で倒れても
麻痺など残ってしもうても
指先・爪先　刺激すりゃ
脳と末端繋がって
動きの通路を取り戻す

爪先・指先　肝刺激
指を使うは　命の刺激
身も心も　躍動す

令和五年二月十三日

原精龍先生墓前に作有り

横山精真

春初の省墓　雨は還宜し
愈世塵を洗うて　昔時に帰らしむ
五題の高吟　天地に問うて
感恩報謝　吾が師を追う

令和五年二月十三日
於原精龍先生墓前有作
春初省墓雨還宜　愈洗世塵歸昔時
五題高吟問天地　感恩報謝追吾師

（語釈）○省墓…お墓参り。○感恩報謝…恩に感じ、恩に報いる。

（通釈）春の初めのお墓参り、小雨模様だがこれも好い。世俗の埃を洗い清めるかのようで自分も心を洗い清め、昔に立ち返らせて呉れるようだ。

野の仏に始まり、五つの吟を献じた。大恩はお返する事が出来ないが何とか報いようとして常に先生に手を合わせている。

※二月十二日北九州市八幡に岳精会の研修に臨んだ。人数は少ないが改めて相対すると、皆さんの熱心な目線を感じた。懇親会は原精龍先生や千代子奥様のことで特に須崎さんと掛け合いのようになって話が弾んだ。当時のご恩が昨日の事のようにうかんでくる。田中会長には散財をおかけしたが、来て良かったと満足感でいっぱいだった。翌日は気分を良くして春日市原町に、年に一度のお墓参りに向かった。昨夜来の雨は勢いを弱めて降っていた。

駅前のタクシーに乗り一句がうかんだ。お墓の横に待って貰い。吟じた。（野の仏・絶句・寒梅・筑紫野の・俳句）胸が溢れる。タクシーに戻ると運転手さんが「ご両親のお墓ですか?」と聞かれ「イヤ、大恩人です」と言うと溢れるものがあった。本当に有難い二日となった。

「春雨が吾が身を洗う墓参り」

編集室だより【二〇二三年三月】

今泉由利

○四月が卯月と呼ばれる由来。四月の和名は「卯月・うづき・うつき」。由来としては、ウツキの花であり、「卯の花」が咲く五月～六月。旧暦は、太陰太陽暦を使用している故、新暦に、丁度あてはまる訳ではない。旧暦の四月を新暦に換算すると、四月下旬から、六月上旬ごろ。

白い清楚な花をつけ、茎が中空の「空木」を陰暦の四月に花が咲くことから名付いたと。

○安倍仲麻呂

奈良で育ち、幼少より三笠山に慣れ親しんだ。続日本紀、三笠山は、神聖な山とみなされ、遣唐使は、出発に先だって「春日なる三笠の山」に詣で、春日神社で旅の安全を祈願する慣行があった。

○応神天皇の（五世紀初）百済から阿直岐に次いで、王仁が「論語」と「千字文」を携えて来朝。漢字の伝来のはじめとされる。

○飛騨高山へゆく

岐阜県の最北端、子供達のルーツのある所故。新幹線のぞみ号に乗り、高山本線に乗りつぎ、景色はとても興味深々。けれど遠かった。

高山の町を流れる官川に沿い。城下町の古い町並。

乗鞍岳、北アルプスの南端の景色の中を、「飛騨山王宮、日枝神社、江戸時代の代官所高山陣屋、櫻山八幡宮。

古い町並、造り酒屋、味噌屋がのきなみ。

杉の葉の「酒ばやし」が大きく、古く、お酒が出来たと知らせているから、あちこち試し、後日、一升瓶が何本か家に届いた。これで安心。また行くための前調査みたいな旅だった。

○ひとつの言葉が持っている…その言葉の生いたち、通ってきた歴史。その言葉を使う人の資質、使われ方。

一つ一つの言葉に敏感になりたい。

いろいろな経験をつみ重ね、ひとつの言葉と育ってゆきたい。

○鋭きにとがれる山々稜線はやがてひとつの線と暮れゆく
○パタゴニアの氷河を囲む稜線はひとつの面となりゆきて闇
○幾山河トンネルくぐりゆきゆきぬ大江山へゆく道程を
○枯れ色の少しまじれる黒豆畑はぐれ小雲の影通りゆく
○鎌倉の空を充たせる大仏の体内へも登るきざはし
○スペイン語ポルトガル語に紛るるを異にはせざる長き年月
○ちぎれ雲はつかちぎるる所よりいま飛び発ちし日本を覗く
○マイアミの海風に乾く一夜干しかますに似たりかますの味す
○うとう鳥のくちばし形の地形にてうとう坂に住み慣れゆかむ
○信仰は枝垂桜のうすべに色に身延山の石段登る
○粉飾はもう何もない人間を極め最後の息をしたまふ
○ここがここが極楽浄土かわが母の死が横たはる私の前
○比企の岡のひとつ石にてひと休み姫紫苑の花の高さの
○流れつぎやがて荒川墨田川嵐山渓谷川音はげし
○朝の陽に勝鬨橋を午後の陽に佃大橋描けりひと日

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利